

切子ガラス工芸研究所 たくみ工房

代表 高橋太久美さん



伝統技術と新しい挑戦が生み出す輝き
“たくみ切子”

ガラス製品の表面をカットし、美しい模様を浮かび上がらせる技法を「切子」という。日本へは幕末に長崎を経て大阪に伝わり、各地へ。そこから江戸、薩摩で「江戸切子」、「薩摩切子」として開花した。

高橋さんは、高校卒業後に切子の世界に入られ、23歳の時に独立。大きな転機は30代後半に、百数十年間途絶えていた「薩摩切子」の復元という大仕事に参加したこと。



高い技術に芸術性の高さが特徴の「薩摩切子」。高橋さんは、この薩摩切子の技法に、モダンなデザイン、手作業による磨きを加え、美しい輝きを放つ「たくみ切子」を生み出した。日本伝統工芸近畿展8回連続入選、新美工芸会展での受賞などの実績を持つ。

また、海外で展示会を開催するなど「たくみ切子」はまさに芸術品として高く評価されている。

さらに、後継者育成のために開かれている教室には遠方からもたくさんの方が通う。オリジナルグラスを作りたい方から作家志向の方まで、目的に応じた指導を行い、切子の技術を未来へ伝えている。

増田敏也さん

デジタル陶芸家



「デジタル」×「リアリティ」
小学生のころにはまった
TVゲームの世界感を立体的に表現

まるで、ゲームの世界から飛び出したようなカクカクしたデジタル的なドット絵を焼き物で立体的に表現するデジタル陶芸家の増田さん。制作方法は超アナログ。フリーハンドで描いた方眼用紙の型を使い、板状にした土を刃物で“カクカク”に削っていく。着色は釉薬を使用せずマットな雰囲気に仕上げる。「実在感のないコンピューターグラフィックと、物質としての存在感が強い陶芸。真逆のイメージのものが組み合わせさったことで生まれる意識のギャップを楽しんで欲しい。」と増田さんは話す。



これまでに約150点もの作品を制作。依頼されることもあれば、自身の思いを作品化することも。「身の回りにある何気ないもの」、「国宝や重要文化財の陶芸の名品をオマージュしたもの」、「原型をくずしたり伸ばしたりする『バグる』シリーズ」等、他にはない独創的な表現に高い評価が集まる。今年7月に世界一の工芸コレクションを誇るロンドンのヴィクトリア・アンド・アルバート博物館に収蔵が決まるなど世界からも熱い注目が集まる。

2018年10月号

光明堂 辻田佛壇店

伝統工芸士 辻田一雄さん



400年続く伝統工芸の技を伝承
一つ一つの彫りに魂を込める「仏壇彫刻師」

400年の歴史を持つ「大阪仏壇」の彫刻を家業とする家に生まれ、25歳でサラリーマンを辞め、「彫刻師」としての道をスタートした辻田さん。

今では大阪で2人だけとなった貴重な「大阪仏壇」の彫刻師。表現の細かさが「大阪仏壇」の特徴。国の指定する「伝統工芸品」にも選ばれている。



慣れた手つきで、松・雲・龍・修行僧などを約30種の小刀・丸ノミで彫り上げていく。一つ一つの彫りに精魂を込め、機械では真似できない繊細さを表現する。「彫刻刀を砥石で研ぐのに1年。並の彫りができるようになるのに10年。複雑で細かな模様が彫れるのには、さらに7年かかる。」と辻田さん。頭の中にはできあがった立体のイメージが浮かんでいて、それに基づいて図案を作成したり、彫りを進めるそう。

そんな辻田さんの作品は、第16回（平成25年度）の日本伝統工芸士会の作品展で1位を取得している。

マルニ工業株式会社

代表取締役 浅野傑さん

パンク修理に慣れていない人の強い味方！
ゴム原料から製品まで
一貫した生産システムを完備する
パンク修理材メーカーは日本唯一！



プロ用だけでなく、自分でも簡単に自転車や自動車のパンク修理ができる製品を揃えるマルニ工業株式会社さん。自転車のタイヤのパンク修理には、パッチと接着剤タイプのほか、最近では、スプレー缶タイプのものが人気だ。これは、バルブに缶の先を差し込むだけのもの。ほんの10秒ほどで、揮発性の泡がタイヤの中の空気を満タンにし、同時にノリの成分が穴をふさぐ。



また、ジャッキアップ・タイヤ交換なしで簡単に応急パンク修理ができる自動車用のキットも人気が高い。キズ穴の程度にもよるが、安全な場所まで移動できたり、修理工場に駆け込むことができる。タイヤ交換に慣れていない人にうってつけの商品だ。

同社の製品は、世界60カ国でも販売中。「Made in Japan」の修理材は、海外でも信頼が厚い。